

漁況海況予報事業*

竹内 淳一・杉村 允三・吉村 晃一
 阪本 俊雄・仲井 孝夫・他 6 名

本事業は、特定研究開発促進事業の漁況海況予報事業費補助金による補助事業として実施した。調査の内容および海況、漁況の特徴の概要は下記のとおりである。詳細については別途刊行する「昭和58年度漁況海況予報事業結果報告書」に記載する。

1. 調査の内容

- 1) 定線調査（沖合，沿岸，浅海）
- 2) 漁場一斉調査（モジャコ等）
- 3) 標本漁船調査（曳縄漁業，カツオ竿釣漁業，スルメイカ釣漁業）
- 4) 漁況海況情報および海況速報の作成

2. 漁況海況の特徴

1) 海況の特徴

1981年（昭和56年）10月頃に発生した「大型の冷水域」は遠州灘沖にあり、黒潮は蛇行流路を継続している。

黒潮は1983年4～7月中旬までB型流路，その後はB型とC型流路を反復している。

(1) 潮岬南沖の黒潮主流位置；潮岬南沖の黒潮主流の離岸距離は，以下のように経過した。

年 月	1983年									1984年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
潮岬南沖の 黒潮主流の 離岸距離 (マイル)	70	30	35	45	40	30	25	35	40	50	35	40
	55	20	50	50	35	30	30	40	30	40	40	50

（水路部海洋速報昭和58年度第8号～24号，昭和59年度第1号～7号，
 上段は月上半期，下段は月下半期の値である。）

黒潮主流位置は「やや離岸」を基調にして，ゆるやかな接岸傾向であった。

(2) 黒潮系水の貫入，表層暖水舌；紀伊水道域への黒潮系水の貫入は，水道中央域（135°E付近）あるいは水道東部域にみられた。1983年4月と1984年1月には，黒潮系水は和歌山県側から水道内部にまで進入したと判断される。

熊野灘では，黒潮北縁部からの表層暖水舌が136°E付近から陸岸と平行に北東方向に向って形成されることが多かった。

* 漁況海況予報事業費による。

(3) 沿岸水温；紀伊水道域における表面水温は4，9月の高目（平年差， $+0.5 \sim +2.0$ ℃）以外は低目～著しく低目（ $-0.5 \sim -2.5$ ℃）であった。とくに1984年1～3月には，紀伊水道内部から瀬戸崎にかけての内湾および浅海域を中心に著しい低温（1984年冬春季の異常低温現象）が記録された。この低水温は1963年（昭和38年）の冬季にみられた異常冷水に匹敵するものであり，この異常低温に伴い魚介類の浮漂斃死およびマダイ等内海系魚類の紀伊水道への大量移出が観察された。

中下層水温は，4，6月にやや高目（ $+0.5$ ℃）であった以外は低目～著しい低目（ $-0.5 \sim -7$ ℃）が続いた。とくに8～9月には平年差が $-3 \sim -7$ ℃に達する著しい低水温が観測されている。同時期の塩分の平年差は $+0.1 \sim +0.5$ 程度と高塩分であることから，この中下層水温の低温化は，下層水の湧昇現象が原因の一つと推察される。

2) 漁況の特徴

(1) マイワシ；全国的にみると資源は依然として高水準を維持しているとみられるが，夏季を中心に多く来遊する0才魚が大幅に減少している。冬季の中羽主体の来遊もややおくれぎみでその量も少ない，漁獲量は前年より約40%減少している。

(2) カタクチイワシ；資源の水準は依然として低いが，ここ数年やや上向きの兆しがみられる。紀伊水道域では，夏季に好漁，秋～初冬にかけてもやや好漁であった。熊野灘南部域では，晩秋～初冬にかけて好漁であり，漁獲量は平年，前年を上回った。

(3) ウルメイワシ；資源は低水準で横ばい状態である。夏季を中心に来遊する0才魚が少なかった。初冬に来遊する中羽は少なかったが，2月になると熊野灘南部域で平年以上の漁獲があった。

(4) シラス；春季にはマシラス主体の漁であり，不漁であった。夏季のカタクチシラスは，量的には少ないものの増加傾向にある。秋～冬季のシラス漁は，前年を上廻り，1972年（昭和47年）以来の好漁であった。

(5) マアジ；資源水準は著しく低い。近年，東シナ海中部系群の減少が著しく，この系群からの補給は減少し，各地のローカル群に由来するものが主体となっている。資源の低水準が続くなかで，1980年（昭和55年）発生群からやや増加の兆しがみられる。0才魚の漁獲は夏秋季を中心に多く，前年を大きく上回った。

(6) サバ類；南西海区での資源水準は高い。ゴマサバの漁獲割合は，1976～1977年（昭和51～52年）頃の約10%からしだいに増加し，1982年（昭和57年）には約35%に達したと推定されていることから，マサバは減少しているもののゴマサバが増加していると判断される。紀伊水道域では，春～秋季の中・大型群の漁獲は前年よりも減少した。熊野灘南部域では，春～夏季の漁獲が前年よりも増加している。

(7) カツオ；すさみ漁協での曳縄による漁獲量は，4月に128.6トンと前年（63.7トン）を大きく上回る好漁であった。しかし5月以降の漁獲は低迷し，総計198.6トンで前年（412.3トン）を大きく下回った。

(8) ヨコワ；すさみでの曳縄による漁獲量は総計0.6トンであり，1979年（昭和54年）以降の漁獲量（約12～49トン）と比較すると極端な不漁であった。

(9) ブリ；熊野灘南部域の定置網漁場（4ヶ統）で1983年12月～1984年6月に漁獲された6kg以上のブリは，合計約2,080尾であった。これはこれまでの最低の漁獲であった前年の約3,600尾よ

りもさらに少ない。1～2月に漁獲されたブリは10 kg以上の割合が比較的多く、近年では珍しい大型ブリであった。

(10) スルメイカ；全国的にみた資源水準は低いが、南西海区での漁獲量は1980～1983年（昭和55～58年）の期間、比較的好漁がつづいている。枯木灘域の夏イカ漁は、前年並み、平年の1.6倍の漁獲があった。

(11) タチウオ；1977年以来瀬戸内海東部タチウオ春仔資源は潰滅状態にあるが、それでも夏秋仔資源の台頭によって、1978年以降は県下で年間約6,400～7,700トンの漁獲が続いている。ところが、本年は、海況の項でも前述したように、夏期～秋期の紀伊水道の著しい低温化によって（8、9月に紀伊水道50 m層18℃以下）本種資源は大打撃を受け、本年の漁獲量は約4,000トンと1977年と同じ大不漁に終わった。

(12) マダイ；本年の加太における漁獲は約90トンとかなり高い漁獲の水準であった。紀伊水道では今冬の異常寒波による水温低下によって古老もかって体験したこともない大量の内海マダイの移出があり、冬期マダイの好漁が続いた。湯浅湾定置網においても大漁した。